様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　３日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０４７８
研究課題名（和文）　とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究

研究課題名（英文）　Compilation and Investigation of Tohazugatari Lexicon with All Instances

研究代表者
石井　久雄　（ISII　HISAO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：70124188

研究成果の概要（和文）：『とはずがたり』の全自立語について，全事例の意味・用法を記述し，どの意味・用法にどれだけの事例があるか，どのような型の事例が多いか，ということを一覧することができる辞典を作成しようとして，その基礎を形成した。すなわち，おおかたの用語・事例について記述し，一語の意味・用法の出現の偏りを見るなどした。しかし，なお連語・構文などの特徴を記述に取り込む余地があり，今後，他の作品も見合わせながら，意味の設定，その定量の方法といった基本的な問題に向かい合いたい。

研究成果の概要（英文）：We have attempted to compile the lexicon of "Tohazugatari: the confession diary of a imperial lady in thirteenth-century Japan" with all instances, and described the meaning of each instance, so could observe the semantic frequency in each word. Now we will consider the syntactic features etc. and solve such basic problems as the setting and the counting of the word meaning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：日本語学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：語彙・意味　辞典　全用語　全事例　とはずがたり

１．研究開始当初の背景

多義語について，どの意味が多く現れ，あるいは少なく現れ，その多少がどのように条件づけられているか，といったことは，明らかでない。一般化するならば，語義の出現の定量的研究というものが，行われていない。古典文芸諸作品の用語をめぐって，われわれは，科研費挑戦的萌芽研究「古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究」（2008～2009年度，研究代表者石井久雄）で検討したが，作品個個から精細に研究する必要がであると実感した。

２．研究の目的

『とはずがたり』の全自立語について意味・用法を整理し，全事例を挙げる辞典を，作成する。この辞典では，用語ごとに，意味用法を出現頻度とともに示し，かつその実際の事例を文脈とともに一覧する。

このような辞典は，言語史研究，特に語彙史・意味史研究にとって，必須の用具であるが，前例を見ない。他の作品にも同様の辞典が作成されることを期待し，その魁けとする。

用語の意味用法の整理・記述は，差し当たり，意味分類を適度に行い，前後の用語つまり慣用句・連語を考慮し，しかも用語個個の特性を尊重する，という方針を採る。

３．研究の方法

次のように研究・作業を進めた。

(1) 用語の意味用法の記述作業は，コンピュータ上で行う。成果としての辞典も，コンピュータ・ファイルとして提供することとし，それを印刷したものとして書籍を計画する。

(2) 『とはずがたり』の本文は，久保田淳『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』（1999年，小学館，新編日本古典文学全集 47）により，用語の意味・用法の解釈についても，同書の注釈・現代語訳を尊重する。

その本文をコンピュータ上で扱うために，コンピュータ・ファイルとして作成する。さらに，全文に自立語の標識を入れ，文脈付き全事例一覧（KWIC）を作成する。第1年次に終了する。

(3) 高梨信博『とはずがたり語彙表』（2002年，早稲田大学文学部高梨信博研究室）によれば，出現頻度24以上の用語203で事例数15000以上に達し，全事例の半数に近い。その大頻度の用語の意味用法の記述を，主として第1～2年次に進める。それと語基あるいは用字を同じくする小頻度の用語も，併せて記述する。小頻度の用語（全用語5900余の半数以上2900余は頻度1である）を，主として第3年次に処理する。

作業は，以上(1)～(3)に亘って，大学院生の協力による。

(4) なお，高梨『とはずがたり語彙表』，およびその編集の基である辻村敏樹『とはずがたり総索引　本文篇・自立語篇・付属語篇』（1992年，笠間影印叢刊 98～100）には，本研究の計画・実施で負うところが大きい。

また，辞典3点，すなわち佐々木信綱『万葉集事典』（1956年，平凡社），北山谿太『源氏物語辞典』（1957年，平凡社），秋山虔・室伏信助『源氏物語大辞典』（2011年，角川学芸出版）は，各作品の全用語を取り上げ，本研究の理念形成にも大いに参考になる。

４．研究成果

辞典本文の例を挙げる。辞典では前後の文脈を適量で必ず示すが，ここでは省略ないし最小限に止める。（　）内は，『とはずがたり』の巻Ⅰ～Ⅴおよび久保田『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』のページ・行である。>> 以下は，辞典には記さないが，この辞典作成ないし研究遂行の意義にかかわるものとして，本報告のために記す。

(1) 辞典の冒頭

以下に古典語彙表としたのは，宮島達夫他『日本古典対照分類語彙表』（下記５．主な発表論文等〔図書〕参照）である。そこに見えず，別作品にあるとしたのは，『日本国語大辞典第二版』（2000年，小学館）等による。

あい〈愛〉　仏教語。　件数 1

「三種の愛」臨終に際しての愛執三種。　件数 1

三種の愛に心をとどめ、　（Ⅰ216.15）

>>　「愛」は複合語に現れるのが普通で，独立した用法は古典語彙表に見えず，正法眼蔵にある。「三種の愛」の解釈は久保田による。

あいぜんわう〈愛染王〉　仏教語。　件数 1

「愛染王の法」愛染明王を本尊とする修法。　件数 1

御本坊にて、愛染王の法、　（Ⅰ251.06）

>>　直後に「薬師の法」が現れ，他に「軍荼利の法」「聖観音の法」「北斗の法」も見えるので，辞典本文では「法」でまとめてそれを参照させる。「法」では，直前に助詞「の」を入れるのが一般であったであろうと，指摘する。

あいなし　つまらない。退屈である。　件数 6

元日・元三の雲の上もあいなく、　（Ⅰ250.14）

あいなく言ひならはしたる師走の月を　（Ⅰ252.15）

今宵の女楽はあいなくはべるべし。　（Ⅱ322.16）

御前女房一、二人ばかりにてあるも、余りにあひなしとて、　（Ⅲ370.07）

我一人は余りにあいなくはべるべきに、　（Ⅰ265.05）

前斎宮の御渡り、余りにあいなく寂しきやうにはべるに、　（Ⅰ267.11）

>>　いずれも，連用形であるが，叙述の用法であり，「侍る」を伴ったものもある。つまらなく思う対象はおおむね主題であり，程度を「余りに」で表したものがある。 久保田は，巻Ⅲの1件のみに仮名遣い「ひ」を採る。

あいねん〈愛念〉　件数 1

「愛念の思ひ」　愛欲。　件数 1

愛念の思ひなど、思ひよりたることなし。　（Ⅱ313.03）

>>　古典語彙表に見えず，この意味では梁塵秘抄口伝集にある。

あいべち〈愛別〉　愛別離苦。　件数 1
うたてき愛別なるや。　(Ⅴ521.10)
>>　古典語彙表に見えず，「あいべつ」の形で日葡辞書にある。
あいべちりく〈愛別離苦〉仏教語。　件数 1
愛別離苦の悲しみ、　(Ⅰ260.12)
>>　古典語彙表には「あいべつりく」の形で平家物語の2件がある。

(2) 意味用法で関係が深い用語
ここでは挙例を多く省く。
ひ〈日〉　件数43
①太陽。　件数 6
「日射し出づ」　件数 2
日のちとさし出づるほどに、(Ⅰ229.07)
「日高くなる」　件数 3
日高くなるほどに、　(Ⅰ249.05)
日高くなるまで御殿籠りて、(Ⅰ270.14)
「日入る」　件数 1
日の入るほどに参り着きて、(Ⅳ458.14)
②昼間。　件数 5
「日長し」　件数 1
日も長く、風収まりたるころなれば、(Ⅴ498.10)
「日暮る」　件数 2
いたく取りたることなくて，日も暮れぬ。(Ⅰ258.07)
「昼の御座」　件数 2
昼〈ひ〉の御座〈ござ〉のそばの四間へ入れまゐらせ、　(Ⅰ278.14)
③昼夜を通しての一日。　件数10
「日暮る」　件数 1
年の初めのことなればにやなど思ひて、その日は暮れぬ。　(Ⅰ197.16)
「日暮らす」　件数 2
かくて日暮しはべりて、　(Ⅰ204.01)
「日を隔つ」　件数 2
その折のその暁より日を隔てず、(Ⅰ233.11)
日を隔てずも申したきに、　(Ⅰ236.07)
「日を重ぬ」　件数 3
難行苦行に日を重ぬ。　(Ⅰ211.13)
親に従ひて日を重ね、　(Ⅰ261.16)
「日ごと」　件数 2
日ごとに御墓に参りなどしつつ、(Ⅰ218.07)
④特定の期日。　件数22
「その日」　件数 4
その日の八人上首に付きて勤めはべりき。(Ⅱ316.14)
「次の日」　件数 5
次の日ぞ、京の御所へ入らせおはしましぬる。　(Ⅰ273.13)
「またの日」　件数 1
またの日は行幸還御の後なれば、(Ⅲ417.01)
＝日付を示す。　件数 3
卯月のつごもりの日、　(Ⅱ337.06)
＝その他。　件数 9
五月の初め、例の昔の跡弔ふ日なれば、(Ⅲ361.08)
籠りて五日になる日なれば、(Ⅲ373.10)
つき〈月〉　件数54
①天体。　件数47
「…日（余り）の月・…夜の月」　件数 7
十五日の月いと隈なきに、　(Ⅴ529.13)
十七日の月西に傾きて、　(Ⅰ205.11)
二十七日の月、　(Ⅰ223.12)
二十日余りの月の出づるころ、(Ⅰ245.14)
十三夜の月、御殿の後ろの深山より出づる気色、　(Ⅴ488.09)
「月（さし）出づ」　件数 5，他にも掲出
月出でむ暁までの形見ぞと（Ⅴ493.07)
ことさらに月さし出でてすごく見ゆるに、(Ⅳ469.11)
月いと明くさし出でたるものから、(Ⅱ326.10)
月は宵過ぐるほどに待たれて出づるころなれば、　(Ⅳ430.08)
「月入る」　件数 2
月の入るさの山の端に　(Ⅲ387.02)
西に傾く月は山の端をかけて入る。(Ⅳ481.09)
「月無し」　件数 2
月なきころなれば　(Ⅰ222.12)
待たれて出づる短夜の月なきほどに(Ⅳ468.14)
「月の影，曇りなし」　件数 4
別れし月の影まで、つゆ曇りなく(Ⅲ354.03)
隈なき月の影に、　(Ⅳ475.16)
空に澄む月の影、また水の底にも宿るかと疑はる。　(Ⅴ488.11)
二人有明の月の影思へばいとこそ悲しけれ(Ⅲ376.11)
「月澄む，澄み昇る」　件数 5
澄む月をいかが隔てむ　(Ⅳ470.02)
侍たるる月も澄み昇りぬるほどなるに、(Ⅱ342.09)
「月，隈無し」　件数 3
隈もなき月さへつらき今宵かな(Ⅴ505.14)
「有明の月」　件数 3
有明の月さへつらき　(Ⅰ238.12)
「月宿る」月が映る。　件数 1
宿る月さへ濡るるがほにや　(Ⅳ425.06)
＝その他。　件数15
②月光。月の姿も懸ける。　件数 1
面影霞む春の月、おぼろにさし入りたるに、(Ⅲ356.08)
③暦の月。　件数 4
＝下の他。　件数 1
違はずその月よりただならねば、

(Ⅲ361.01)
「（暦の月の名）の月」　件数 1
師走の月のころにや、　(Ⅰ278.10)
「月立つ」暦の月が改まる。　件数 1
その後は月立つまで、(Ⅲ360.06)
「月の末」　件数 1
またこの月の末には出ではべりぬ。
(Ⅰ245.08)
④１箇月分の日数。　件数 1
月を隔てむと待ちつるも、　(Ⅲ360.15)
⑤「波」を誤る。　件数 1
世を宇治川の川波も袖の湊に寄る心地して、「月ばかりこそよると見えしか」と言ひけむ古言まで　(Ⅳ475.13)
>>　天体と時間との意味がある「日」「月」で，「日」は時間の意味に傾き，「月」は天体の意味に傾く。なお，「月」は，次を，ここに含めず，参照項目とする。
→「月の宮」　件数 1
外宮をば月の宮と申すかとて、
(Ⅳ469.12)

(3) この作品に特徴的な意味用法がある用語
特徴的であると考えられることがらは，次の③のように覚えとして記し残す。
あるじ〈主〉　件数16
①接待・宴席の場を設けた人。　件数 3
主の院出でさせたまひて、　(Ⅱ295.02)
②家屋の持ち主。　件数 7
これは館の主なり。　(Ⅳ466.05)
③特に寺の房主。著者が泊まる房について言うので，房主は尼である。　件数 6
主の尼君が方より、　(Ⅳ446.04)
主の尼御前、　(Ⅱ332.14)
主の尼御前たち、　(Ⅰ248.10)
主の尼たちの　(Ⅰ249.07)
主の前に居たれば、　(Ⅰ247.08)
端つ方に出で、主の方へも、(Ⅱ331.15)
→「じふぜんばんじょう（十善万乗）の主」
件数 1
「じふぜん（十善）の主」　件数 1
「ばんじょう（万乗）の主」　件数 1

(4) 大頻度の用語
細かく注釈を補うので，ここでは読み難い。なお検討中の問題にも触れる。
す〈為〉動詞，変格活用。　件数 716
①実質的意味をもった独立用法。　件数　34
と言ひたるさまやしたるらむと、
(Ⅱ309.04)
糸綿にて山滝の景色などして参らす。
(Ⅲ379.05)
長筵などしたる有様も　(Ⅳ430.04)
これにてしてはべるほどに　(Ⅳ442.05)
静かなる住まひをして、　(Ⅰ245.06)
>>　第1～4例のように，「である」「しつらえる」といった実質的な意味をもつものを，ここに入れた。しかし，第5例のように，直前の体言を動詞化するという形式的な意味のみをもつものが，半数程度ある。この実質性と形式性との区別に，難しいところがある。
②形式的用法。　件数 606
「名詞＋す」　件数 202
人来て案内すなり。　(Ⅰ242.09)
あはれに御覧ぜられぬる。　(Ⅰ225.10)
>>　体言から動詞を形成するのが，「す」の最多の用法であり，以下にも適宜別に項目を立てる。ただし，このうちに「御覧ず」22件を含む。
「漢字一字＋す」　件数　76
事のやう奏すれば、　(Ⅰ269.06)
など案ぜらるるは、　(Ⅰ200.13)
>>　上の「御覧ず」とともに，「す」を含めて一複合語とするのが通例であろう。しかも，このうちに，「案ず」のように「す」が連濁であるもの13件を含む。
「動詞連用形＋助詞＋す」　件数　75
なべてならぬ屏風立て、小几帳立てなどしたり。　(Ⅰ198.12)
>>　動詞を添意などで体言化したときに，動詞性を形式上で保つ手段である。添意には副助詞「など」が62件を占める。
>>　以下，「す」についてよりは，複合語の意味用法として記述すべきものである。
「音す」　件数　20
明けぬる音して、　(Ⅰ201.04)
など言ふ音すれば、　(Ⅰ201.04)
音する人もなく、　(Ⅰ270.01)
うち騒ぎたる人音して尋ぬ。(Ⅰ222.14)
>>　第1例は夜明け時の雑音，第2例は声が，それぞれ聞こえてくる。第3例は他動で音を立てる，1件のみ。第4例は複合の「人音」であるが，ここに入れる，1件のみ。
「心地す」気持ちになる。　件数 142
情けなき心地しながら、　(Ⅰ196.12)
御答へ申すべき心地もせず、(Ⅰ204.07)
>>　すべて「心地」が連体修飾を伴う。第2例のように係助詞・副助詞を介するもの16件も，ここに入れる。
＝以下，件数のみを示す。
「和語（絶え等）＋す」　件数　9
「副詞＋す」　件数　37
「形容詞連用形＋す」　件数　4
「形容動詞＋す」　件数　1
「し（接頭辞用法）＋動詞」　件数　8
「せむかたなし」　件数　2
「…とす・として」　件数　17
「…にす」　件数　13
③付属語を形成する。　件数　76
「助動詞むとす」　件数　26
「助動詞むず」　件数　9
「助詞して」　件数　41
>>　③はこの辞典の埒外であるが，記し残す。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）
① 入江さやか，『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法，
同志社国文学，78号，pp.156-145，2013年，査読無
② 石田裕子，『とはずがたり』における動詞「とる」の意味・用法，
同志社日本語研究，17号，pp.1-10，2013年，査読無
③ 牧野さやか，『とはずがたり』における「かみ(上)」「うへ(上)」の意味・用法，
同志社日本語研究，17号，pp.11-17，2013年，査読無
④ 森あかね，『とはずがたり』における「沙汰」の意味，
同志社日本語研究，17号，pp.19-24，2013年，査読無
⑤ 丸山健一郎，『とはずがたり』における「気色」の意味の定量，
同志社日本語研究，17号，pp.25-39，2013年，査読無
⑥ 宮島達夫，鈴木泰，石井久雄，安部清哉，古典分類語彙表（稿），
学習院大学計算機センター年報，33号，pp.40-121，2013年，査読無

〔学会発表〕（計1件）
① 石井久雄，『とはずがたり』における動詞「す(為)」の意味・用法の定量分析，
語彙研究会，2010年9月8日，愛知学院大学（名古屋市）

〔図書〕（計1件）
① 宮島達夫，鈴木泰，石井久雄，安部清哉，日本古典対照分類語彙表，
添付CDに収めたデータ約20種（大きさ合計約74MB）の作成・解説，笠間書院，2013年

６．研究組織
(1)研究代表者
石井　久雄　（ISII HISAO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：70124188

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
入江　さやか　（IRIE SAYAKA）
同志社大学・文学部・助教（有期）
研究者番号：10580748

石田　裕子　（ISHIDA HIROKO）
同志社大学・
日本語日本文化研究センター・助教（有期）
研究者番号：00580820